

瀬良英介の一般業界向け

飼料・畜産トピックス（215）

2009年9月

### （215）米国酪農でのワクチンの使われ方とバイオセキュリティ

米国農務省は全米家畜健康モニターシステムの一環として酪農経営がワクチンをどの程度現場で使っているかを定期的に調べています。最近の調査では酪農の37.6%がコリフォルム・ワクチンを少なくとも牛群の何頭かには使っているということが判っています。牛群の何頭かには使っている他のワクチンではサルモネラが13.4%、シデロフォア・リセプタースが4.1%、マイコプラズマが1.8%、スタフィロコッカス・オウレウスが7.3%です。コリフォルム乳房炎を予防するためのワクチンとサルモネラ・ワクチンの利用に関しては地域での違いがありました。米国西部地域の酪農のほうが東部の酪農よりも多くの牛にワクチンを打っていました。

確かに牛の疾病を予防するには色々な方法がありますが、管理が予防の主な鍵になるという考え方が現場でも認められてきています。そしてバイオセキュリティ管理を酪農現場に導入することで生産効率を改善し臨床疾病を減らすことができることが判ってきています。

バイオセキュリティ管理計画を導入するにあたっては、その農場でのリスク要因がどのように影響を与え疾病がどのようにして入り広まっているかを調べることです。疾病は一軒の農場から次の農場へ牛群を移動させるときに起きますし、一軒の農場内での牛群の入れ替えや移動時にも起きます。牛群内、或いは、牛群間での疾病感染についての予防プログラムを考慮して実施しなくてはなりません。病原菌がどのようにして酪農現場に入り込むかは疾病によってそれぞれ違います。リスク要因として考慮したほうがよいものには次のような点が挙げられるでしょう：

#### 牛群間でのリスク要因

1. 新しく牛を牛群に加える
2. 牛の検疫をきちんと行っていない
3. 新しく牛を牛群に導入するとき疾病検査を要求していない
4. 新しく牛を牛群に導入するときワクチン摂取を要求していない
5. 共進会やショウに出展した牛が戻ってくる
6. 牛が他の動物、餌や水と接することを容認する
7. 人間、車、或いは、器材などを介して疾病が広がることを容認する

#### 牛群内でのリスク要因

1. 何頭もの牛を同じ分娩房を使う
2. 子牛を育てるところで病気の牛をいれて使う
3. 病気の牛を健康な牛から分けることをしない
4. 糞尿を扱う器材で飼料を混ぜたり飼料給与を行う
5. 糞で汚染されている飲み水
6. 糞尿などで汚染されている飼料を給与する
7. 子牛にパストゥール殺菌していない全乳、廃棄する乳、或いは、初乳を飲ませる  
(分娩直後に飲ませる初乳は抗体移行のために必要：注、瀬良)
8. 他の動物が牛、飼料、飲み水などに接する
9. ワクチン接種を怠る
10. 人間、車、或いは、器材などを介して疾病が広がることを容認
11. 不適切な消毒、或いは、消毒を行っていない乳頭、乾乳する牛の処置、或いは、  
乳房の衛生処置

ワクチン接種やバイオセキュリティ管理についての記述は全米乳房炎協議会の2009年9月号 Vol. 32 No. 3「乳房トピックス」から引用したものです。余談ですが、米国酪農の乳牛へのワクチン接種の割合は決して低くないと思いますし、また、疾病を防ぐ方法として排除すべきリスク要因は農場によって違うことの理解度は相当なものだと思います。私は日本の公的機関が調査した日本酪農の乳牛へのワクチン接種割合や種類などの報告を拝見していませんが、恐らく、現場での割合は決して高くないと思います。間接的理由として日本ではワクチン接種に肯定的な考えを持つ人や子供へワクチンを接種することのリスクに懸念を表明する人の割合が低いことによります。加えて、人間への新型インフルエンザ・ワクチンなどの製造や接種の度合いは米国のほうが高く、また、製造したワクチンの10%をアフリカなど開発途上国に寄贈してよいとの米国政府発表には恐れいった次第。同じレベルでのワクチンの寄贈は英国やヨーロッパ政府なども発表しているときに日本では国内製造が足りない分は国外から買ってくればよいと発言した厚生大臣が居たことに愕然としました。

私見ですが日本では酪農経営者のみならず畜産・養鶏経営者の多くがワクチン接種に関しての意識が決して高くないと感じています。疾病に必ずかかるというのでもないのに予防の観点からわざわざコストをかけてワクチン接種を全頭羽数に行うことには非常に懐疑的です。現代のような競争が厳しい時代、余分なコストはかけたくないという考え方が強くなるのは当然でしょう。ただ、乳肉卵などの生産に負の影響を与え、生産物の出荷も出来なくなるという経済損失とワクチン接種で負の影響を防ぐ確率が高くなる科学的事実を天秤にかける経営判断能力は今後益々重要になります。

牛群内と牛群間、つまり農場内と農場間、或いは、外部から農場への出入りがもたらす様々

なりリスク要因を如何に個々の農場が持つ個別の問題として理解し対応するかということにも残念ながら日本の酪農、或いは、畜産・養鶏経営者は理解・咀嚼・実施の度合いが高くないと感じています。これからの日本の酪農、畜産・養鶏経営者は新政権の影響を少なからず受けるようになりますから、自分の経営については最終的に自主判断をする必要が生じます。経営については輸入をどのように捉えるか、また、生産コストの個別農家への生産販売差額保障がもたらす利点と限界を冷静に天秤にかける必要が生じます（瀬良、2009）。